

9 の anecdote から覗える退院支援の課題

～2019 年度 退院支援研究会の活動報告～

発表者：退院支援研究会 代表 本間 毅

アシスタント：退院支援研究会事務局 本間 樹里

「anecdote(アネクドート逸話)」は個別的事態を挙げ、仮説の検証は少数の対象で行い、理論は典型的な事例に基づいて推し進めるが必ずしも集団的・普遍的ではない。

(Young A.)

私たちは、本学会第8回横須賀大会(2016)で「医療における対人援助としての退院支援を再考する」と題してワークショップを行った。その後、2017年5月に本学会の中村正理事長を新潟にお迎えし、「対人援助学」について学び退院支援研究会は発足した。

2018年度年次大会の特別講演は、立命館大学総合心理学部 齋藤清二教授に「医療に於ける多職種協働と物語読取り能力」をお願いした。2019年は神奈川県立保健福祉大学 臼井正樹教授による「介護福祉を巡る断章」のあと、新潟で社会福祉と介護福祉をフィールドに活躍する仲間たちとシンポジウムを行った。全員が参加する対話の時間は、敢えてグループワークの形をとらないことで言葉が言葉を呼ぶ熱い質疑応答と化した。これまで、3ヶ月に一度のペースで続けてきた事例検討会は2019年9月に第9回を迎え、心不全の悪化が原因で入院した独り暮らしの85歳男性が、大幅に生活習慣を見直す課程で生じた問題点について検討した。医学的には軌道に乗った支援の裏には、二度とつらい思いをしたくないというクライアントの切羽詰まった思いと、大切なものを諦めなければならない現実があった。生活習慣病の患者さんに「死んでも良いからもう一度酒を飲み、ご飯を腹一杯食べたい」と言われ、子を介護する老母には「子供より先に死ぬわけにはいかない、どうか願いを叶えて欲しい」と乞われる事は少なくない。対人援助学会大会(2017・2018)と定期検討会(第19・23回)で、参加者から貴重な意見や提案をもらうことで、私自身の行き詰まりは解消され、研究会の仲間たちにそれを伝えることができた。

当研究会の実践を報告し、兼愛無私、悩めるものとともに考える姿勢を学びたい。